

事態の時間的存在と超時間的存在

彭 玉全

キーワード：頻度の副詞、事態、事態の時間的存在、事態の超時間的存在

要 旨

事態の存在には、時間的存在と超時間的存在がある。事態の時間的存在は、頻度の副詞で表される。事態の超時間的存在は、「普通」「通常」「一般的に」などのような超時間的存在副詞によって表される。これらは、いずれも事態の存在の多寡を表すという共通点がある。本稿では、頻度の副詞と超時間的存在副詞を「事態の時間性」「事態の主体性」「副詞と文末表現との共起」「副詞と叙述類型との関係」といった4つの側面から比較し、この2種の副詞の性質・機能の相違点を検討した。

1. はじめに

事態が時間軸に沿って生起するということは、一般的な常識である。事態の生起の回数は、時間軸上における事態の存在の多寡とも見られる。頻度の副詞は、時間軸上において事態がどのぐらい存在するかを表すものである¹⁾。例えば、次の(1)における「しばしば」や(2)における「時々」は、時間軸上において存在する事態の多寡を数える副詞である。それに対して、(3)における「普通」や(4)における「通常」は存在する事態の多寡を表すものである。

- (1) 加藤はうわごとのようにいいつづけていた。入院中、村野孝吉と外山三郎がしばしば見舞いに来た。そしてたった一回だけだったが影村一夫が見舞い

*1 矢澤(2000,p.230)では、「頻度の修飾成分は、ある事態が時間軸上においてどのぐらい存在するかという、事態の存在のありかたを表す」と規定している。仁田(2002,p.276)では、「<頻度の副詞>とは、一定期間内に、ある間隔を置いて生起する事態の生起回数のありかたを多寡性も含めて表す副詞である。」と規定している。

に来た。(『孤高の人』)

- (2) 「僕、精神性ってのは、よくわかるんだ。精神がないと、しぶとくならないからね。僕、この頃、**時々**聖書、読んでるのよ」(『太郎物語』)
- (3) 「親は**普通**子供より先に死ぬ」(『類語大辞典』柴田武・山田進編 講談社 2002)
- (4) **通常**、病院は患者を治療した後、社会保険診療報酬支払基金(社保基金)などに診療報酬を請求する。(『毎日新聞』2000年1月3日)

矢澤(2000,2007)では、(1)(2)における「しばしば」「時々」のような副詞成分は、頻度の修飾成分と呼ばれ、(3)(4)における「普通」「通常」のような副詞成分は、傾向性の修飾成分と名づけられている。これらの副詞成分の共通点について、矢澤は、次のように指摘している。

頻度の修飾成分も傾向の修飾成分も、事態の存在する多寡を表すという点では共通する。この点から、これらを事態存在の修飾成分としてまとめることができよう。(矢澤 2000,p.232)

頻度の修飾関係とは、傾向性の修飾関係の一部であり、傾向性の修飾成分の「時間軸への個別事態の位置づけ」の用法もまた、頻度の修飾関係と見なすことができる。(矢澤 2007,p.181)

しかし、ここの「頻度の修飾成分」と「傾向性の修飾成分」とは、同じものではないと思われる。本稿では、(1)(2)のように、時間軸において事態が存在することを事態の時間的存在と呼び、事態の時間的存在の多寡を表す副詞を頻度の副詞と呼ぶ。(3)(4)における「普通」「通常」のような副詞は、時間軸上によって事態の存在の度合を数えるのではなく、時間を捨象化した¹²非現実世界において事態の集合に対して、当該事態が多いか、そうでない事態が多いかということを表す。このような時間を捨象化した非現実世界における事態の存在を事態の超時間的存在と呼ぶ。また、超時間的に存在する事態の多寡を表す副詞成分を超時間的存在副詞と呼ぶことにしたい。それでは、同じく事態存在のありかたを表す副詞としても、超

*2 この場合の事態は、時間と完全に無関係ではないが、時間の概念を超えて観察される事態である。

時間的存在副詞と頻度の副詞と比べて、性質がどう違っているか。

本稿では、頻度の副詞と超時間的存在副詞との性質・機能の相違点を検討してみる。具体的にいえば、①事態の時間性、②事態の主体性、③副詞と文末表現との共起関係、④副詞と叙述類型との関係、といった側面を考察する。

本稿は『CD-ROM版 新潮文庫の 100 冊』（新潮社版、1995 年）における日本人作家の 62 作品（23.71MB）と、新聞データベース『毎日新聞』（1999 年 1 月～2003 年 12 月、675MB）と『朝日新聞』（1985 年 1 月～1991 年 12 月、17.5MB）から用例を集める。

2. 事態の時間的存在と超時間的存在

頻度の副詞は、時間軸上において存在する事態の多寡を表すものである。この場合の事態が多いか少ないかは、時間と関係づけられている。つまり、時間軸に沿ってある時間幅において事態が発生する度合いが数えられている。時間の推移に従って、事態が時間軸に存在しているので、事態の時間的存在と呼んでもいい。われわれは、しばしば時間軸にある時間幅を取って、存在する事態の多寡を判断する^{*3}。例えば、次の (5) (6) (7) において波線で示されている成分は、時間幅を表すものである。事態がその時間幅においてどのくらい存在しているか、頻度の副詞で表されている。これに対して、(8) (9) では、時間幅が明言されていない。(8) では「彼が活着ている時」、(9) では「話し手の発話時までのある時から」だと、それぞれ時間幅として想像できる。

(5) 「那覇市出身なので、高校生のころはいつもここを歩いていたんです。」

（『毎日新聞』2001 年 2 月 19 日）

(6) やがて欧米の抽象表現主義との交流を深め、ニューヨークを中心に 1950 年代から 60 年代にかけてたびたび個展を開催した。

（『毎日新聞』2000 年 10 月 3 日）

(7) ただ、週末はたまに台所に集まり、一緒に飲んだりする。

（『毎日新聞』2001 年 6 月 21 日）

(8) 「彼は一死んだ主人のことだけどーいつも古い音楽ばかり聴いてたわ」

*3 時間幅が明言されていない場合もある。

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』

- (9) 「はっ！クサキサンスケ警察長官であります。首相閣下はいつもご機嫌うるわしく……」(『ブンとファン』)

それに対して、次の(10)(11)(12)においては、事態の多寡は、時間軸において数えられるのではなく、時間を捨象化した非現実世界におけるある事態の集合¹⁴において、当該事態がどのぐらい占めているかというように判断される。

- (10) **通常**、大学を解雇される場合は、研究者としての能力が理由とされる。
(『若き数学者のアメリカ』)
- (11) **一般的に**、アメリカの主要大学では、教授の給与は主に研究業績によって左右される。
(『若き数学者のアメリカ』)
- (12) 『路傍の石』はおもしろい小説であり、有三の作品として珍しくユーモアもある。(『路傍の石』解説)

以上、事態の時間的存在と超時間的存在について説明した。事態の時間的存在の多寡は、頻度の副詞によって表される¹⁵。事態の超時間的存在の多寡は、「普通」「通常」「一般的に」「ほとんど」「大抵」「主に」「多く」「珍しく」などの副詞によって表される。

2.1. 事態の時間性

事態の時間的存在のありかたは、頻度の副詞で表されている。頻度の副詞が修飾する事態は、時間軸上において存在する事態の多寡を表すため、時間と関わっている。つまり、「時間性」を持っている。われわれ人間は時間軸上における事態の多寡を観察するとき、必ず具体的な時間幅を観察の基準として判断するのである。ただし、この時間幅を明言する場合もあれば、それを明言しない場合もある。

言語形式についていえば、時間幅は、文において頻度の副詞の前後にある時間

*4 矢澤(2000,2007)では、事態の主体の集合(集団)と呼ばれているが、これに対し、本稿では事態の存在を考察するために、モノの集団ではなく、事態の集合と呼ぶことにする。

当然、事態の超時間的存在は、モノ(主体)の数に関係がある。

*5 ただし、従来の頻度の副詞には、事態の超時間的存在も表すものがある。

を表す時の状況成分^{*6}によって表される。時の状況成分は、しばしば文に出現するが、出現しない場合は、話し手が頭の中にその時間幅を設けている。そうでなければ、時間軸における事態の多寡が判断できない。例えば、次のような文において時の状況成分は、頻度の副詞の前に表れている。これらの時の状況成分は、事態の時間的存在の多寡を判断する時間幅を表している。頻度の副詞の前後に表れる時の状況成分は、頻度の副詞に修飾される事態が時間性を持っている証拠の一つである。

(13) 母は昔、いつもこの足踏みミシンをかけていた。

（『毎日新聞』2000年5月5日）

(14) 高校時代、しょっちゅう停学になって迷惑をかけた。

（『毎日新聞』2001年8月16日）

(15) 近頃、時々「おれのこと嫌いになったんか」とか、「おまえが自分から離れていきよるような気がする」って言います。

（『毎日新聞』2000年2月4日）

(16) 最近、しばしば「お父さんのしつけができていない」としかられる。

（『毎日新聞』2000年6月2日）

それに対して、事態の超時間的存在の場合、時間を捨象化したため、超時間的存在副詞の前に、時間幅を示す時の状況成分が出現する必要がない。だが、コーパス調査によると、(17)～(20)のように、時の状況成分が現れる場合もある。「珍しく」は、時の状況成分と共起しやすい。「珍しく」が修飾される事態は、事態の集合と比べて、一回しかない事態を表すので、「珍しく」はしばしば時の状況成分と共起するのである。ほかの事態の超時間的存在副詞は、(21a) (22a) のような例しか見つからなかった。ここからみれば、超時間的存在副詞は、時の状況成分と共起しにくいという傾向が見られる。なぜかという、超時間的存在副詞は、物事の属性や慣例を表すのに用いられるので、時の状況成分が出現する必要がないのである。特に、(21b) (22b) (23) で示すように、「近ごろ」「最近」「この間」などの時の状況成分は、超時間的存在副詞と共起しにくい。したがって、超時間的存在副詞

*6「時の状況成分」は、仁田(2002)の用語である。「時の状況成分」は、教科研文法の「状況語」という用語から受け継いだものようである。「時の状況成分」は、出来事や事柄が成り立つ時を表す文の成分である。

に修飾される事態は、時間性を持っていないと思われる。

- (17) 昔は**普通**、親子で金の貸し借りはしなかった。(『毎日新聞』2002年3月24日)
- (18) 昼は、**たいてい**、この稲葉山麓のあたらしい屋敷にいた。書院で書きものなどをしながら、障子越しに庭づくりの指揮をしているのである。
(『国盗り物語』)
- (19) 翌朝、太郎は**珍しく**早く起きた。(『太郎物語』)
- (20) その夜、**珍しく**佐分利夫人は化粧していた。(『あすなろ物語』)
- (21) a **普通**、コンビニといえば、道路から入りやすい1階にあるのが常識。(『毎日新聞』2000年3月1日)
b (?近頃/?この間/?最近) **普通**、コンビニといえば、道路から入りやすい1階にあるのが常識。
- (22) a **通常**、ビタミンCは熱に弱いが、ゴーヤのビタミンCは炒めてもほとんど失われない。(『毎日新聞』2002年9月11日)
b (?近ごろ/?この間/?最近) **通常**、ビタミンCは熱に弱いが、ゴーヤのビタミンCは炒めてもほとんど失われない。
- (23) (?近ごろ/?この間/?最近) 女性よりも男性の方が**一般的に**背が高い。(作例)

時間性を持つかどうかは、副詞に修飾される述語のシタ形とスル形の対立からもその傾向が見られる。本稿は、コーパス調査の用例における任意の200例を調査対象として、頻度の副詞と事態の超時間的存在副詞に修飾される述語のスル形とシタ形を調べた。調べた結果は、表1と表2で示す。

表1と表2とを比べると、頻度の副詞に修飾される述語のシタ形は、超時間的存在副詞に修飾される述語のシタ形より、パーセンテージが高い。頻度の副詞は、「まれに」「めったに」を除けば^{*7}、述語のシタ形がいずれも10%以上を占めている。

*7「まれに」と「めったに」は、仁田(2002)では、「頻度の副詞」と見られ、矢澤(2007, p.181)では、「傾向性の修飾成分」(つまり、本稿での「超時間的存在副詞」と扱われている。本論文では、「まれに」は、「頻度の副詞」と「超時間的存在副詞」を跨っているものと考えられるが、ここでは、「頻度の副詞」の用法としている。

表1 頻度の副詞に修飾される述語のスル形とシタ形

頻度の副詞	スル形	シタ形	その他	用例数
常に	80 (40%)	82 (41%)	38	200
始終	45 (38.1%)	55 (46.6%)	18	118 ^{*8}
しょっちゅう	101 (50.5%)	71 (35.5%)	28	200
頻繁に	114 (72.5%)	45 (22.5%)	41	200
しきりに	101 (50.5%)	79 (39.5%)	20	200
しきりと	60 (51.7%)	44 (37.9%)	12	116
しばしば	79 (39.5%)	96 (48%)	25	200
たびたび	63 (31.5%)	96 (48%)	41	200
よく	111 (55.5%)	71 (35.5%)	18	200
ちよくちよく	19 (46.3%)	16 (39%)	6	41
ちよいちよい	15 (45.4%)	11 (33.3%)	6	33
時々	108 (54%)	79 (39.5%)	13	200
時折	125 (62.5%)	58 (29%)	17	200
時たま	64 (64%)	25 (25%)	11	100
たまに	145 (72.5%)	34 (17%)	21	200
たまには	116 (58%)	32 (16%)	52	200
まれに	183 (91.5%)	12 (6%)	5	200
めったに	179 (89.5%)	17 (8.5%)	4	200

表2 事態の超時間的存在副詞に修飾される述語のスル形とシタ形

超時間的存在副詞	スル形	シタ形	その他	用例数
通常	175 (87.5%)	2 (1%)	13	200
普通	182 (91%)	1 (0.5%)	17	200
一般的に	178 (89%)	3 (1.5%)	19	200
大抵	156 (78%)	18 (9%)	26	200
珍しく	57 (28.5%)	114 (57%)	29	200

*8 「始終」「しきりと」「ちよくちよく」「ちよいちよい」「時たま」は、用例数は 200 例未満であるので、表1ではこれらの副詞の全用例数を示している。

それに対し、事態の超時間的存在副詞は、「珍しく」を除いて、述語のシタ形がいずれも 10%以下の値を示している。「珍しく」は、前述したように、一回限りの事態に対して修飾するので、シタ形を多く取っている。この点は、ほかの事態の超時間的存在副詞と異なっている。シタ形の全体的な傾向から見て、頻度の副詞に修飾される事態は時間性を持っているのに対し、事態の超時間的存在副詞は時間性を持っていない。

2.2. 事態の主体性

頻度の副詞に修飾される時間的存在の事態の主体について、矢澤 (2000,p.231) では、「頻度の修飾成分は、特定の個体において、その事態が見られる場合の多寡を表すのである。」と指摘されている。ここの「特定の個体」は、単数の主体であると思われる。だが、次の (25) (26) では、事態の主体は、いずれも複数である。したがって、頻度の副詞に修飾される事態の主体は、個体であるが、単数でも複数でもかまわない。頻度の副詞に修飾される事態の主体は、特定できる。つまり、主体性を持っている。ただし、その主体は、文において明示しない場合もある。

- (24) 行助はいつもこのテレビ視聴の時間にひとりで部屋に戻り、高等学校の教科書をひらいた。(『冬の旅』)
- (25) 少年達はいつもなにか事が起きるのを待っていた。(『冬の旅』)
- (26) ネット先進国の米国では、クリントン前大統領ら政治家がたびたび登場している。(『毎日新聞』2001年6月21日)
- (27) 演奏が終わったあと、梯さんはしばしば、横や後ろなどあらぬ方に向かっておじぎをする。(『毎日新聞』1999年10月5日)

それに対して、超時間的存在副詞に修飾される事態の主体については、矢澤(2000)は、次のように述べている。

「通常」「普通」「一般的に」のような傾向性の修飾成分は、恒常的な状態でも修飾対象とすることができる。これらは、特定の集合⁹⁾において、その事態が見られる場合の多寡を表すのである。(矢澤 2000,p.231)

*9 矢澤 (2007,p.181) では、「集団」と言われている。

「珍しく」は、評価的な修飾成分であるが、その評価性は、やはり「場合の多寡」を問題にしている。ある事態が見られる機会や個体（または、特定集合）がそうでない場合と比べて極めて僅少であり、例外的であるという判断を表す。(矢澤 2000,p.231)

超時間的存在副詞は、個々の主体における事態の多寡ではなく、事態の集合において見られる事態の多寡を表す。(28) (29) (30) (31) のように、「普通」「通常」などの超時間的存在副詞に修飾される事態の主体は、特定できない。つまり、主体性を持っていない。だが、「珍しく」は、上で述べたように、一回限りの事態を修飾するのに用いられるもので、その主体が特定できる。(32) では、事態の主体は、「太郎」と特定できる。したがって、事態の超時間的存在の場合、事態の集合は特定できるが、事態の主体は特定できないので、事態は主体性を持っていない。

- (28) 内藤が金子と揉めていたのは、ファイトマネーから差し引かれる経費が原因であるに違いなかった。通常、ファイトマネーからは三十三パーセントのマネジメント料が引かれることになっているが、内藤は金子に四十パーセントのマネジメント料を認めていた。(『一瞬の夏』)
- (29) 死後三十年と言え、普通近親の者にも忘れ去られる年月ではないだろう。長野政雄氏の死は、いかに後々まで多くの人に大きな感銘を与えたことであろう。(『塩狩』)
- (30) 一般的に高血圧や糖尿病の持病があると、強いストレスなどで発症することが多い。(『毎日新聞』2000年4月1日)
- (31) 大抵、契約書の裏面に付録のように付随しているが、字が薄くて極めて細かいのが現状だ。(『毎日新聞』2000年5月3日)
- (32) 翌朝、太郎は珍しく早く起きた。(『太郎物語』)

2.3. 副詞と文末表現との共起

彭 (2010b) では、事態の時間的存在の多寡を表す頻度の副詞では、「いつも、常に、頻繁に、たびたび、ちよくちよく、ちょいちょい、時々、ときおり、時たま、たまに、たまには」などが、命令・意志・希望・勧誘などの文末表現と共起できると指摘している。例えば、

- (33) 「寒さとひもじさを、いつも忘れるな！」父の背中で聞いた言葉が、いつも胸にある。(『毎日新聞』2001年6月24日)
- (34) 循環風呂の所はできるだけ湯を取り換える回数を増やし、常にさし湯をしてください。(『毎日新聞』2002年1月16日)
- (35) 「ここは美女が多いからもっと頻繁に訪れたい」(98年7月、南部ミンダナオ島訪問で)(『毎日新聞』2001年1月21日)
- (36) 「ぜひ松山に来て、たびたび洗車してください。」(『毎日新聞』2002年9月3日)
- (37) 「時々食べにきて下さい。」(『毎日新聞』1999年1月4日)
- (38) まだ両親が達者で、ときたま成城の澄江の家に電話をよこし、たまには顔を見せなさい、と言ってきていた。(『冬の旅』)

それに対して、超時間的存在副詞は、いずれも命令・意志・希望・勧誘の文末表現と共に起できないと思われる。なぜかというと、超時間的存在副詞は、時間を捨象化した現実世界における事態の多寡を客観的に叙述するのに用いられ、話し手の心的態度を表すことができないからである。コーパスにも、超時間的存在副詞と命令・意志・希望・勧誘の文末表現と共に起する用例は見つからなかった。

- (39) 一般的に、アメリカの主要大学では、教授の給与は主に研究業績によって左右される。(『若き数学者のアメリカ』)
- (40) 睡眠リズムは普通、生後4カ月までに完成する。(『毎日新聞』2001年2月17日)
- (41) 国際通話では通常、利用料の多い先進国側が、後進国側に一定金額を支払うことを取り決める。(『毎日新聞』2000年3月2日)

2.4. 副詞と叙述類型との関係

益岡(2008,p.4)では、「叙述様式として、対象の属性を叙述するタイプと広義のイベント(出来事)を叙述するタイプを区別し、それぞれ『属性叙述』(Property Predication)、『事象叙述』(Event Predication)と名づける」と叙述類型を規定している^{*10}。

*10 叙述類型論については、益岡(2000,2008)、真野(2008)、真野・影山(2009)を参照。

頻度の副詞は、いずれも、事象叙述に用いられることができる。(42)～(45)で示すように、「いつも」「常に」「しばしば」は属性叙述にも使われるが、ほかの頻度の副詞は、属性叙述に用いられない。また、彭(2010a)で述べたように、頻度の副詞には、「しきりに」「しきりと」「絶えず」「頻繁に」「時々」「時折」は、動作連続にも用いられる。

- (42) だが、3000人の会員が誕生日ごとに払いこむ寄金に頼っており、台所はいつも火の車だ。(『朝日新聞』1987年7月19日)
- (43) 「進化というものはそういうものです。進化は常につらく、そしてさびしい。
『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (44) 食べ物は常に薬である。(『毎日新聞』2002年7月12日)
- (45) 真の懐疑家は論理を追求する。しかるに独断家は全く論証しないか、ただ形式的に論証するのみである。独断家は甚だしばしば敗北主義者、知性の敗北主義者である。(『人生論ノート』)

それに対して、超時間的存在副詞は、いずれも属性叙述に用いられ、「珍しく」を除いて事象叙述に用いられない。超時間的存在副詞は、事態集合の傾向性である。傾向性は、ある程度で主体の属性と見なしてもいい。超時間的存在副詞は、恒常的事象(状態を含めて)を表すので、その用法は形容詞用法に連続していると思われる。ちなみに、超時間的存在副詞は、動作連続には用いられない。

- (46) 正座すれば、そのひざの高さが、扇子のながさほどあった。扇子は普通、一尺二寸である。怪物とっていい。(『国盗り物語』)
- (47) ヒヤシンスは寒さに強く、普通、植えたら屋外で育てます。(『毎日新聞』2001年1月24日)
- (48) 通常、牛乳は1週間程度で腐る。(『毎日新聞』2000年2月6日)
- (49) 一般的に、設計技師たちの仕事での眼は鋭かった。設計図が彼らのすべてであり、そこから新しい機械が次々と生れ出るために、彼等の眼は図上において百分の一ミリの誤差もないように張りつめていた。(『孤高の人』)

3. 終わりに

本稿は、事態の存在を事態の時間的存在と超時間的存在に分けて、これらを表す

頻度の副詞と超時間的存在副詞を「事態の時間性」、「事態の主体性」、「副詞と文末表現との共起」、「副詞と叙述類型との関係」といった側面から比較した。考察した結果、事態の時間的存在を表す頻度の副詞と超時間的存在副詞には、次のような相違点^{*10}がある。

表3 頻度の副詞と超時間的存在副詞の相違点

副詞	時間性	主体性	文末表現 との共起	叙述類型			事態の 多寡性
				属性	事象	動作連続	
頻度の副詞	○	○	(一部は) ○	(一部は) ○	○	(一部は) ○	○
			(一部は) ×	(一部は) ×		(一部は) ×	
超時間的 存在副詞	×	×	×	○	×	×	○

(注：表3では、「○」は「時間性」「主体性」「事態の多寡性」を持つことや文末表現と共起できること、「叙述類型」に用いられることを表す。「×」は、「時間性」「主体性」「事態の多寡性」を持たないことや文末表現と共起できないこと、「叙述類型」に用いられないことを表す。)

本稿は、頻度の副詞と超時間的存在副詞を構文的特徴（「事態の時間性」「事態の主体性」と構文的機能（「副詞と文末表現との共起」、「副詞と叙述類型との関係」）の側面から考察した。本稿の考察を通して、副詞の研究は、副詞を語彙の意味だけから捉えるのではなく、副詞とその修飾対象である述語動詞のカテゴリーとの関わりや、副詞が用いられる文の構文的特徴などから考察するのも有効であることが示唆されている。

本稿は、頻度の副詞と超時間的存在副詞の全体的な相違点を考察したが、この2種の副詞を個別的に考察していない。例えば、「珍しく」が他の超時間的存在副詞と比べて如何なる性質の違いがあるかは、まだ考察されていない。これらは、今後の課題としたい。

*10「珍しく」は、ほかの超時間的存在副詞の性質と異なっている。表3は、「珍しく」を除いて考えたものである。

参考文献

- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 彭 玉全 (2010a) 「動作連続にも用いられる頻度の副詞について」『筑波日本語研究』
第 14 号, pp.53-74, 筑波大学人文社会科学研究所日本語学研究室
- 彭 玉全 (2010b) 「頻度の副詞と文末表現との共起制限について」『日本学報』第 83
輯, pp.149-161, 韓国日本学会
- 益岡隆志 (2000) 「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』 pp.39-53, くろしお出版
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」『叙述類型論』(益岡隆志編) pp.3-18, くろしお出版
- 真野美穂 (2008) 「状態述語文の時間性と叙述の類型」『叙述類型論』(益岡隆志編)
pp.67-91, くろしお出版
- 真野美穂・影山太郎 (2009) 「状態と属性」『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』
(影山太郎編) pp.43-75, 大修館書店
- 矢澤真人 (2000) 「副詞的修飾の諸相」『日本語の文法 1 文の骨格』仁田義雄・
村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人共著, 岩波書店
- 矢澤真人 (2007) 『日本語情態修飾関係の研究』筑波大学博士 (言語学) 学位
請求論文

用例出典

1. 『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』(新潮社版, 1995 年)
2. 新聞データベース: 『毎日新聞』(1999 年 1 月～2003 年 12 月)
『朝日新聞』(1985 年 1 月～1991 年 12 月)

[付記]

本稿の内容は、レジュメとして筑波大学の矢澤真人先生と橋本修先生の授業で発表したことがある。矢澤先生、橋本先生及び神永正史さんより有益なコメントをいただきました。ここに記して、厚くお礼申し上げます。ただし、言うまでもなく、本稿の不備や誤りは、全て筆者の責任である。

ハウ ギョクゼン／人文社会科学研究所
(2010 年 10 月 30 日 受理)